

『伊勢物語愚見抄』所引の物語本文

小山 順子

*キーワード

伊勢物語・伊勢物語愚見抄・一条兼良・自筆本・注釈

はじめに

(一) 初稿本

初稿本は、以下の奥書を有する(後掲の①田中本から引用)。

御奥書

一条兼良『伊勢物語愚見抄』(以下、愚見抄と略す)は、『伊勢物語』研究史上、旧注の嚆矢として非常に重要な著作である。大津有一・田中宗作・武井和人による先行研究^[1]があり、初稿本と再稿本があること、また、近年ではその中間段階の本があることも報告されている。

では、兼良が愚見抄を著す際に使用した物語テキストとはどのようなものだったのだろうか。小稿では兼良の物語研究の根幹となる『伊勢物語』本文の性質について検討したい。

一、『伊勢物語愚見抄』の諸本

愚見抄は、初稿本から再稿本へ、基本的には増補されて展開している。本稿で調査対象として用いる諸本を掲出する。

長祿四年冬の末つかた、彼物語をひらき見侍る次に、愚見の及所いさゝかするしいだし侍り。すべて箱の底にかくして、しきみの外に出すべからざる物也。桃の花の坊にすみ侍る翁が筆のすさみに書侍り。

この奥書から、初稿本は長祿四年(一四六〇)冬に書かれたものであったことが判明する。長祿四年、兼良は五十九歳である。再稿本は残された写本も多く、刊本でも出版されているが、残された初稿本はきわめて少数で、以下の四種しか知られていない。

① 田中宗作蔵斑山文庫旧蔵本(田中本)

② 国文学研究資料館鉄心齋文庫蔵本(98―721)〈鉄心齋本〉

・ 東海大学付属図書館桃園文庫蔵本(桃1374) ※後半のみ

・ 竹屋子爵家旧蔵本

但し東海大学付属図書館桃園文庫蔵本は閲覧停止、竹屋子爵家旧蔵本は品田太吉「伊勢物語新考」(『日本文学論叢』昭7・明治書院)において紹介されたものであるが、現在は所蔵不明である。①の田中本は、翻刻が田中宗作『伊勢物語研究史の研究』(昭40・桜楓社)所収「伊勢物語愚見抄初稿本(翻刻)」に収められており、この翻刻によって初稿本の研究が進められてきた。

田中本は、田中によると「大体室町末期を下らない書写のようである」とのこと、成立から時代を経ずに書写されたものであるが、誤写誤脱の可能性は当然ある。この①田中本の本文を相対化するのが、②鉄心齋本である。すでに影印が『鉄心齋文庫伊勢物語古注釈叢刊 第9巻』(平13・八木書店)に収められており、鉄心齋文庫所蔵資料の中でも貴重なものとして知られている。

鉄心齋本には、田中本が持つ長祿奥書は無いが、注文からたしかに初稿本であることが認められると、『鉄心齋文庫伊勢物語古注釈叢刊 第9巻』片桐洋一解説に指摘されている。また、墨による傍記、朱片仮名書きによる補筆が入っており、丁寧な校勘が行われたことが窺われるものである。

鉄心齋本で注目されるのは、田中本よりも丁寧に詳細に物語本文を引用している箇所がある点である。以下に一例を示す。傍線部は田中本に無い箇所、()内は田中本のみにある本文である。

【四段】

又のとしのむ月に、梅のはなさかりに、こそをこひていきて、たち

てみ、ゐてみ、見れと

たちてみつ、ゐてみつ、みれとも、といふ也。

こそににるへくもあらず、うちなきて、あはらなるいたしきに

あれたる(也。)西のたいの人、外にかくれて人すまぬ所なれば、荒たると云也。

傍線部は田中本には引かれておらず、物語本文は「たちてみ、ゐて見、れど」「あばらなるいたしきに」のみが示されている。注釈はそれぞれ、「立ちてみ、ゐてみ、見れど」「あばらなる」の箇所に関するものなので、傍線部が無くとも特に支障をきたさないために省略されたものと考えられる。この省略が兼良の執筆段階、書写の段階、いずれになされたものかは検討すべき問題であるが、ともかく、本文引用が丁寧であるというのが鉄心齋本の特徴である^③。

つまり、鉄心齋本は、従来初稿本として用いられてきた田中本を相対化する資料として重要なものであり、また、特に引用されている物語本文については、より情報量が多い。田中本と鉄心齋本の本文を併せて用いることで、初稿本と再稿本の間にある物語本文の異同についても検討できるのである。

(2) 中間本

③刈谷市中央図書館村上文庫蔵本(三甲—994)〈刈谷本〉

※国文研マイクロ資料(30—30—3、E1953)

④武井和人蔵本(武井本)

③刈谷本は、長祿奥書を持つものの、早くから大津有¹によって初稿本であることに疑義が挟まれてきた。近年、武井和人と木下美佳が初稿本と再稿本の中間に位置する性質のものであることを指摘している。初稿本から再稿本への考証過程を辿りうるのみならず、本稿において刈谷本に注目するのは、刈谷本は江戸時代初々中期の書写ではあるが、長祿奥書の後に「此本一条禅閣兼良御筆写物也」という奥書を有すること、また愚見抄では基本的に物語本文は必要箇所のみが引用されるが、刈谷本では全文が引用されているからである。

④武井本は、『思文閣古書資料目録（善本特集 第21輯）』214（平21・10）において紹介され、その後、武井和人の所蔵となった一本である。武井和人・木下美佳『一条兼良自筆 伊勢物語愚見抄 影印・翻刻・研究』（平23・笠間書院）に影印・翻刻を収め公刊された。③刈谷本と同様に、長祿奥書を持つが初稿本とは異なり、再稿本への過渡的な本文を有する。但し、刈谷本とは異なる中間本である。木下美佳解説「一条兼良自筆本『伊勢物語愚見抄』について」によると、初稿本↓刈谷本↓再稿本の増補過程の上には位置しないが、再稿本への兼良の考証過程を表す本であると位置づけられている。

（3）再稿本

再稿本は刊本も出版されており数も多いが、愚見抄所引の物語本文について考察する際に特に重要であるのが、兼良自筆本の以下の一本である。

⑤冷泉家時雨亭文庫蔵伊勢物語愚見抄下巻（時雨亭本）
⑤時雨亭本には以下の奥書がある（以下、奥書にはアルファベットによる通し番号を付す）。

〈A〉（業平略伝、本文略）

京極黄門伊勢物語両本奥書

一本云、

〈B〉（定家武田本奥書）

合多本所用捨也。可備証本。

近代以狩使事為端之本出来。末代之人今案也。更不可用之。

此物語、古人之説不同。或称在中将之自書、或称伊勢之筆作。就彼此有書落事等。上古之人、強不可尋其作者。只可翫詞花言葉而已。

戸部尚書 判

一本云、

〈C〉（定家根源本奥書）

抑伊勢物語根源、古人説々不同。（中略）件本狼藉奇怪者也。伊行所為也。不用之。

先年所書之本、為人被借失。仍為備証本、重所校合也。

戸部尚書 判

〈D〉（愚見抄再稿本跋文）

長祿之末年、披覽此物語之次、粗考古抄之誤、聊書今案之説。件本漸流布世間。有伝写之輩歟。爰上都擾乱後、南京閑居之暇、重加校合、非無訛謬。仍更染禿翰、別編愚抄。專以閑麗翁之艶詞為肝要、

併以定家卿之勝説為指南。蓋不失昔物語之本意、欲為大和歌之助縁也。旧為一卷、今分上下。若數寄之輩有書寫之志者、以此本可為正而已。

文明六年小春中幹日 沙門花押

〈E〉

愚見抄二帖、大内左京兆^{朝政弘}令所望之間、所令附屬也。老筆狼藉定可招後嘲者歟。

文明八年七月上辭

老比丘花押

〈F〉

右愚見抄下卷、一条禪閣御筆也。此抄開後公御作也。上卷紛失可惜而已。

⑤時雨亭本には、業平略伝・武田本奥書・根源本奥書の後に、Dの兼良による再稿本跋文、Eの兼良による書写奥書がある。愚見抄再稿本は、初稿本の十四年後の文明六年（一四七四）、兼良七十三歳の時の著作である。再稿本成立の二年後、文明八年（一四七六）七月に大内政弘の求めに応じて兼良自身が書写したのが、時雨亭本であることが判明する。なお時雨亭本はFの為広奥書に記されるように、上巻は失われ、冷泉為広によって補写されているので、兼良自筆は下巻のみである。

時雨亭本は影印が冷泉家時雨亭叢書41『伊勢物語・伊勢物語愚見抄』（平10・朝日新聞社）に、翻刻が『伊勢物語古注釈大成 第三卷』（平20・笠間書院）に収められている。

二、先行研究

愚見抄所引の物語本文については、池田亀鑑が、「これは桃花房の家本となつたものであるが、その内容は大体流布本の如く思はれ、嘉吉校合本を底本としたものではなく、愚見抄の本文も亦同様である点から見て、兼良の勢語本文に対する考へは、随時展開したものと思はれる」（傍線、引用者）と指摘しているのが早い。池田が「これ」とするのは、當時池田の架蔵であつた現天理図書館蔵兼良本のこと、嘉吉校合本は藤原藤房筆本のことであるが、この二本については後に詳述する。

また田中宗作は、再稿本が持つB・Cの定家奥書や、D再稿本跋文および本文注文に散見する「定家自筆本云」などの文言から、定家校定本に依っていることは疑いないとし、さらに池田説を引用した上で、愚見抄の本文は「大体流布本によっていると思われる」と述べている。但し、天福本や塗籠本と一致する例を挙げ、「愚見抄本文には、注目すべき幾多の問題を含んでいるものであることを提示しておこう」と問題提起を行っている。

近年では、時雨亭本の翻刻を収めた『伊勢物語古注釈大成 第三卷』の片桐洋一・鈴木隆司による解説（以下、片桐・鈴木解説と略す）の中で、引用されている物語本文についても検討が加えられている。片桐・鈴木解説は、後掲する天理図書館蔵兼良筆本の本文と比較し、以下のよう

現在用いられている天福本系統の本文はもちろんのこと、応仁二年桃華老人の奥書を持つ天理図書館蔵一条兼良本の本文ともかなり異なっている。(……)兼良本と一致せず天福本に一致している二箇所については、他にも武田本以外の定家本や古本(別本)、あるいは広本系・略本系なども一致しており、愚見抄本文に天福本固有の本文と一致する箇所は見いだせない。一方、天福本と一致せず兼良筆本と一致している箇所については、(……)武田本独自の本文に一致する箇所が多く、愚見抄の伊勢物語本文が、武田本系統の本に影響を受けていることは確かである。(……)兼良が愚見抄を書く際に非定家本系統の本を含む多くの伊勢物語を見ていたことも確かなようである。ただし、定家本以上に非定家本の本文を尊重されたとは考えられない。(……)愚見抄の伊勢物語本文が広本系など非定家本の本文とのみ一致している箇所もいくつかあるが、そうした伊勢物語から直接に影響を受けたわけではないであろう。全体として見れば、愚見抄の伊勢物語本文は、いわゆる根源本など比較的初期の定家本と武田本の本文の影響を強く受けているようである。

以上のような検討によれば、愚見抄は一見したところ相当に乱れた伊勢物語の本文に基づいて書かれているように見えるが、それは現代の我々の目から見てということであって、やはり愚見抄の伊勢物語本文は、兼良による当時の本文研究の成果と見ておくべきものである。

重要な指摘に傍線を付した。武田本系統本文との一致が見られ、基本

的には武田本系統から影響を受けていること、但しそれとも一致しない箇所も見いだされ、根源本など初期定家本と武田本の本文から影響を受けていることを指摘している。その上で、兼良による当時の本文研究の成果として愚見抄所引の伊勢物語本文を位置付けている。

この片桐・鈴木解説による考察は、おおむね首肯できるものであるが、補うべき点がある。

一点目は、愚見抄の引用本文の初稿本・再稿本間の異同については触れていない点である。二点目は、片桐・鈴木解説で兼良筆本としては、後掲する天理図書館蔵本を用いているが、解説刊行後に新たに公刊・報告された資料もあり、より多くの重要な資料と対校できる点である。

愚見抄所引の物語本文が、兼良の『伊勢物語』研究の根幹をなすものであることを思量すると、再稿本の本文が兼良の最終的な校訂本文であり、また兼良自筆本である時雨亭本が最も重要な資料であることは無論である。であるとしても、初稿本から中間本、再稿本への過程における物語本文の異同についても併せて考察することによって、その性質について明らかにすることがあると考えられる。また、同じく兼良自筆の武井本や兼良筆『伊勢物語』など、新たに報告された資料もあり、これらも加えてより詳細な対校を行うことができるのである。

以下、この二点について検討を加えながら、愚見抄所引の物語本文を再検討する。

三、一条兼良筆本『伊勢物語』

愚見抄の初稿本・中間本・再稿本については、第一節で詳述したので、兼良筆『伊勢物語』諸本について紹介する。

まず、片桐・鈴木解説で対校本として用いられている天理本である。

[1]天理大学附属天理図書館蔵兼良筆本（913・32―イ31）〈天理本〉

天理本は以下の奥書を有する。既出の奥書は本文を省略する。

〈B'〉（B定家武田本奥書の後半「此物語……」のみ）

〈G〉（為相奥書）

以祖父卿真筆本、不違一字書写校合了、可備証本矣。

藤為相 在判

〈H〉

辞上都平安城之旧居、寓南京春日之里之旅店、以閑寂之暇、終書写之訖。雖相顧惡筆、頗可備證本物歟。

応仁二年九月日 桃華老人

池田亀鑑旧蔵本。池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究（研究編）』（昭35・有精堂出版）第一篇第三章第四節第四項（流布本系統）第二類六「一條兼良本伊勢物語」に、「架蔵の一本」として紹介されている本であり、「本書の筆者は、果して桃華老人、一條兼良その人であるか否か不明である。萬一兼良自筆でないとしても、彼を下ることあまり遠からざる時代の書寫に係るものなることは疑ない」と記されている。

天理本はB武田本定家奥書の後半部とG為相奥書の後に、応仁二年（一四六八）九月の兼良奥書を有しており、兼良六十七歳の時の書写であると知られる。但し[1]天理本の兼良筆本の筆跡には兼良の特徴を見いだせない。自筆本とは見なしがたく、室町末期に兼良筆本を書写したものであると考えられる。

以下、片桐・鈴木解説の対校に用いられていない、重要な兼良本について述べる。

[2]吉田幸一蔵伝藤原藤房筆本（藤房本）

影印・翻刻が古典文庫624『伊勢物語 伝藤原藤房筆本』（平10・古典文庫）に収められており、これまでも池田亀鑑・大津有一・福井貞助・武井和人・吉田幸一によって詳しい考察がなされている。藤房本は紅梅文庫旧蔵本で、67丁裏五行目までが藤原藤房筆、同六行目以後が一条兼良の補筆である。藤原（万里小路）藤房は、永仁四年（一二九六）生、没年未詳。鎌倉時代末期から南北朝時代の公卿。後醍醐天皇の側近として討幕運動に参画し、建武政権では要職を担った人物である。

なお[2]は、兼良筆の補筆部分のみならず、全冊にわたって兼良が羈考本・定家本によって校合を加えており、兼良の『伊勢物語』研究の跡が残されている点が重要である。奥書を掲出する。

〈I〉（業平官歴、本文略）

〈B〉（定家武田本奥書）

近代以狩使事為端之本出口[※]末代之人今案也。更不可用之。

此物語、古人之説不同。或称在中将之自書、或称伊勢之筆作。就彼

此有書落事等。上古之人、強不可尋。其作者、只可翫詞花言葉而已。

戸部尚書 在判

〈G〉(為相奥書)

〈C〉(定家根源本奥書)

〈J〉(堯孝奥書)

此草子借或好土之本、誂人令書写之、予加校合畢。随分秘藏本云々。

雖然以未所注之文字奥書等、僻字少々在之歟。但書様文字遣以下不違彼本写之間、不及料簡者也。

權少僧都堯孝 在判

〈K〉

此伊勢物語古本、女房令所持也。但奥詞未終功、又誤字落字多也。

仍借堯孝僧都本、加校合、又書繼奥詞。件本以朱注訓積、今以墨書之又□本有落字不審事等。仍以此本為正不必改之。從善古人之格言也。

詞林樗散 **花押**

〈L〉

嘉吉三年八月下旬、以定家卿真筆本重校合畢。但件本奥端朽損

端哥「おきもせずねもせて」といふ哥より端不見。奥は「野とならはうつらとなりて」といふ哥より奥不見。中間一二枚又朽

損。件本白色小草子也。冷泉中将持和朝臣、借用或人令見予之次、加校合畢。

花押

〈M〉

傍付訓積等定家自筆本不載之。想是後人為談義、注付者歟。悉次虚誕事、不可信用也。

〈A〉(業平略伝、本文略)

〈N〉(登場人物略伝、本文略)

〈O〉

以上伊勢物語譚百九十五首

〈P〉

大和物語 業平子滋春作 在次君

Lの兼良奥書には、嘉吉三年(一四四三)八月に定家筆本により校合した旨が記されている。嘉吉三年当時、兼良は四十二歳。愚見抄初稿本よりも前に筆写した『伊勢物語』として、兼良の『伊勢物語』研究の上でも重要なものだということになる。なお、Jは堯孝による本奥書であり、K奥書によると、堯孝本を用いて校合したことが分かる。

堯孝本は、天理大学付属天理図書館蔵堯孝本(913・32―イ9)が存している(以下、堯孝本)。堯孝本には、C定家根源本奥書・I業平官歴・B定家武田本奥書・G為相奥書の後に、本奥書としてJ堯孝奥書があり、再びB定家武田本奥書、文永五年(一二六八)為家奥書を有している。兼良が堯孝本を参照していることは、藤房本のJ・K奥書から判明するので、この堯孝本の本文も合わせて調査した。

片桐・鈴木解説の後で報告されたのが、次の一本である。

3 佐渡博物館蔵佐藤横界コレクション本(佐渡博本)

藤島綾「佐渡博物館蔵『伊勢物語』―解題・影印―」(『調査研究報告』30、平22・3)に、解題が付され、全冊の影印が掲載されている。奥書は以下の通り。

〈C〉(定家根源本奥書)

〈I〉(業平官歴、本文略)

〈B〉(定家武田本奥書)

〈G〉(為相奥書)

〈Q〉

応仁己丑歳孟夏中澣日、老眼馳秃筆以或本加書写了。頗可備証本者也。

桃華老人_{判在}

〈R〉

彼御自筆不違一字書写校合了。

文明十八年十月三日

従五位下行源昌康

応永三年(一四六九)五月の兼良奥書が付されており、兼良六十八歳の時に写した本を、文明十八年(一四八六)に源昌康が書写したものである。^[1]天理本の翌年に書写したということになる。また、^[1]天理本と^[3]佐渡博本の二冊は、愚見抄の初稿本から再稿本の間書写された本である、という点にも注意しておきたい。

なお他にも、兼良筆本と伝えられる本が、永青文庫・国文学研究資料館鉄心斎文庫にある。

永青文庫本は影印が勉誠社文庫111『伊勢物語 伝一条兼良筆本』(昭57・勉誠社、解説・片桐洋一)と細川家永青文庫叢刊10『伊勢物語・大和物語』(昭59・汲古書院、解説・迫徹朗)に収められている。奥書は^[1]天理本と同じB'を持つ。片桐解説は「いわゆる武田本系の本文と見てよいのである」、迫解説は「本書はこの天理本と書写関係があったと考えられないでもない。ただし、後に述べる本書の独自異文を天理本は持たない。(中略)本書の本文が武田本系統に属することは間違いないと思われる」と指摘している。兼良および天理本と関連があるとは思われるが、兼良奥書を有してはいないので、今回は紹介にとどめておく。

国文学研究資料館鉄心斎文庫蔵(98―18)の伝一条兼良筆本は、奥書は無く、箱蓋左肩に題簽「一条兼良本 伊勢物語」、帙中央に題簽「伊勢物語 伝一条兼良筆」とある本である。56丁表(75段途中)から58丁裏(78段途中)までは後人による補筆であり、「涙には以下三枚後おほみゆき以上/飛鳥井雅章補筆」と井上通泰による極書がある。日本古典全集第三期八『伊勢物語』(昭3・日本古典全集刊行会)に影印が収められている。但しこの本も、兼良の自筆とは見せず、また本文も、兼良筆本は愚見抄所引本文と同様、基本的に武田本系統の本文に近いが、鉄心斎本は天福本系統との一致が多く、兼良との関係は薄いものと考えられる本なので、今回の検討からは省く。

四、本文対校

では、本文対校を行い、異同について確認してゆく。時雨亭本に兼良自筆が存する下巻のみを対象として調査した。

(一) 藤房本との一致箇所

注目されるのは、愚見抄の独自本文が藤房本と一致する箇所が散見することである。

【六〇段】

〔時雨亭本〕

このおとこ、うさのつかひにて人の国へいきけるに、

初稿本から刈谷本・武井本まで、愚見抄では同じ本文である。しかしこの箇所の本文は、武田本では「この男、うさのつかひにていきけるに」となっており、天福本他、『伊勢物語』諸本で一貫している。天理本・佐渡博本・堯孝本も「いきけるに」。その中で、藤房本のみが、以下の本文を有するのである。

〔藤房本〕

このを^おとこ、うさのつかひに^て人のくに^へいきへたり^けけるに

へ^は内は見せ消ち、以下同。傍記と見せ消ちが入り、錯綜する本文を有するが、見せ消ち前に「人の国へ」という本文を持つことが確認できる。なお「人の国へ」という本文を持つのは、近年刊行された加藤洋介『伊勢物語校異集成』（平28・和泉書院。以下、加藤著書と略）によ

ると、藤房本のみである。

藤房本との関わりが窺われる箇所を、以下に挙げる。

【七七段】

〔時雨亭本〕

いまみればよくもあらさりけり。そのかみこれやまさりけん。あはれかりけり。

愚見抄諸本の中でも異同がある。時雨亭本と同じ本文を持つのは、鉄心齋本と刈谷本で、田中本は「そのかみはこれや」、武井本は「そのかみや」となっている。

武田本では「そのかみはこれや」、武田本・天福本以下の諸本および天理本・佐渡博本・堯孝本も同じである。一方、藤房本は、時雨亭本・鉄心齋本・刈谷本と一致する。

〔藤房本〕

いま見ればよくもあらさりけり。そのかみこれやまさりけむ。あはれかりけり。

「そのかみこれや」の本文を持つのは、加藤著書によると藤房本のみである。

【八二段】

昔これたかのみこと申込みおはしましけり。山さきのあなたに、みなせといふところに所ありけり。

初稿本・武井本には該当箇所の引用無し。刈谷本でも「ところ」となっている。武田本・天福本以下の諸本および天理本・佐渡博本・堯孝本「宮」

であるが、藤房本のみが愚見抄と一致する本文を持つ。

〔藤房本〕

むかしこれたかのみこと申みこおはしましけり。山さきのあなたに
みなせといふところに所へみありへてけり。

以上、愚見抄の本文が、藤房本の独自本文と一致することから、兼良が藤房本の本文を参看したことが窺われる箇所を挙げた。藤房本のみというわけではないが、藤房本を含むごく少数の諸本にしか見いだせない本文が愚見抄と一致する箇所は、他にも「二条の後の、また春宮の御やす所と申ける時」(七六段、諸本「みやすん所」)、「木の枝につけて、たうのまへにたてれば」(七七段、諸本「たてたれば」)、「かりはねんころにせて、さけをのみみつゝ」(八二段、諸本「ねむころにもせて」)、「ひとつこにさへありければ、いとかなしうし給ふけり」(八四段、諸本「し給ひけり」)がある。

こうした例から、兼良が愚見抄に引く物語本文に、藤房本が色濃く影響していることは確かであると考えられるのである。

(二) 初稿本から再稿本への本文変更と藤房本

初稿本から再稿本へと展開する上で、兼良が本文を再検討している箇所がある。その展開の上に、藤房本が関わっていると推測される箇所を挙げる。

まずは、六五段の例を挙げる。

【六五段①】

〔田中本〕

……私の御名を御心に入れて、御こゑいとたうとくて、

〔時雨亭本〕

……私の御名を御心に入れて、御こゑはいとたうとくて申たまふを、

田中本と同じ本文を持つのが鉄心齋本と武井本で、ともに「御声」となっており、一方、刈谷本は時雨亭本と同じく「御声は」の本文である。

武田本「御こゑは」以下、天福本ほかの諸本、および天理本・佐渡博士・堯孝本でも同様であるが、諸本の中で藤房本のみ、初稿本・武井本の「御声」と一致する本文が見られる。

〔藤房本〕

……私の御名を御心に入れて、御こゑいとたうとくて申たまふを、傍記で「は」があるが、本行の本文は「御こゑ」である。加藤著書によると、「は」を持たない本文は、この藤房本のみである。

初稿本の段階では、兼良は「御声」の本文を採用していたが、再稿本への過程で、諸本および藤房本傍記の「御声は」へと変更したものと考えられる。

次の例は、同じ六五段であるが、逆に藤房本を参照して変更したらしき箇所である。解釈とも関わるので、注文も挙げる。

【六五段②】

〔田中本〕

此女のいとこの御やす所女をばまかまでさせてくらにこめてしほり給ふ

染殿後の在所をまかてさせて、此女をおしこめてをかれたるを、
「くらにこめて」とはいへり。……

〔時雨亭本〕

この女のいとこの御やす所をはまかてさせて、くらにこめてしほり
たまふければ、

染殿の後の御在所をまかてさせて、この女をおしこめてをかれた
るを、「くらにこめて」とはいへり。……

武井本は田中本と同じ「女をば」、鉄心齋本・刈谷本は時雨亭本と同じ
「をば」である。初稿本の中でも異同があるが、武井本でも「女をば」
であるので、兼良がこの本文を採用したことがあるのは確かである。な
お、武田本・天福本以下の諸本および天理本・佐渡博本・堯孝本でも「女
をば」である。一方、藤房本の本文は、「をば」となっている。なお、加
藤著書によると、他に「をば」の本文を持つのは、倉野憲司蔵伝明融筆
本・鉄心齋文庫蔵順覚奥書本で、天理図書館蔵承久三年奥書本は「をば」
に「女をば」の傍記がある。

〔藤房本〕

この女のいとこのみやす所をはまかてさせて、くらにこめてしへを
りたまふければ、

「女」の語があるか無いかによって、「この女のいとこの御息所が、女
を退出させて」もしくは「この女のいとこの御息所のいらつしやる所か
ら退出させて」、つまり「御息所」を女を退出させる主語と取るか、場所
と取るか、解釈に違いが生ずる箇所である。注文は初稿本から中間本、

再稿本まで一貫しており、異同は無い。兼良は一貫して「この女のいと
この御息所がいらつしやる場所から退出させて」の意で解釈していたが、
「女をば」の本文だと、どこを退出させたのかは明確でない。そのため、
一度は「女をば」の本文を採用したものの、後に藤房本を持つ「をば」
の本文に決定した、という過程が窺われるのである。

次は、注文の増増と関わって本文が決定されている箇所である。兼良
の考証の過程をたどるために、五本の愚見抄の本文を比較して検討する。

【八一段】

〔田中本〕

いたじきのしたにはひありきて

いたじきの下にはひありくは、御子たちにををなしたる心に
いへるにや。

〔鉄心齋本〕

いたしきの下にはひありきて

板敷のしたにはひありくは、御子達に恐をなしたるにいへるにや。

〔武井本〕

いたしきのしたにはひありきて

いたしきの下にはひありくは、御子たちにおそれをなしたる心に
いへるにや。

〔刈谷本〕

いたしきの下にはひありきて、人にみなよませはてよめる

いたしきの下にはひありくは、御子たちにおそれをなしたる心に

いへるにや。

〔時雨亭本〕

いたしきのしたにはひありきて

いたしきは、板しき也。下にはひありくは、御子たちにおそれをなしたる心なるへし。

初稿本・刈谷本では「いたしき」、武井本・再稿本では「いたしき」となっている。

この箇所は、武田本系統では「いたしき」・天福本系統では「たいしき」となっており、また諸本間でも本文異同が錯綜する箇所である。武井本・時雨亭本の「いたしき」の本文を有する本も少なくはないが、藤房本では次のようになっている。

〔藤房本〕

いたしきのしたにひありきて

武井本・時雨亭本の本文は、藤房本の傍記本文と一致するということになる。また、藤房本で参看されている堯孝本も「いたしき」という本文を有している。天理本は「いたしき」。佐渡博本は後述する。

なお、採用する本文の変更に伴い、注文にも変化が見られる。初稿本・中間本では、板敷の下を這い歩くという表現に込められた心情を説明する文章で同文であるが、再稿本になると、「いたしき」の本文を採って、それが板敷の意であるという説明が加わっている。つまり、「いたしき」の本文を採用したという明確な意識が注文に表れている。本文の変更と注文の増補が連動しているのである。

【九九段】

〔田中本〕

右近の馬場のひをりの日

……左近右近の馬場にて、近衛のとねり共馬に乗て弓をいる事也。
……五日は左近のまてつかひ、六日は右近のまてつかひ也。

〔鉄心齋本〕

右近馬場のひをりの日

……左近の馬場にて、近衛のとねり共馬に乗て弓をいる事あり。
……五日は左近のまてつかひ、六日は右近のまてつかひ也。

〔武井本〕

右近の馬場のひをりの日

……左近右近の馬場にて、近衛の舎人とも馬に乗て弓をいる事あり。
……五日は左近のまてつかひ、六日は右近のまてつかひ也。

〔刈谷本〕

昔、左近の馬場のひをりの日、(以下略)

……左近右近のむまはにて、近衛のとねりともむまにのりて弓をいる事あり。……五日は左近のまてつかひ、六日は右近のまて結也。

〔時雨亭本〕

左近の馬場のひをりの日

としことの五月に、左近右近のむまはにて、近衛のとねりとも、むまにのりて弓をいる事あり。……五日は左近のまてつかひ、六

日は右近のまつかひ也。……左近のひをりは五日の事なるへし。

……

初稿本・武井本では「右近」、刈谷本・時雨亭本では「左近」と異同がある。武田本・天福本以下の諸本および天理本・佐渡博士・堯孝本では「右近」、藤房本では「左近」となっている。なお加藤著書によると、他には大島本系統の神宮文庫本・阿波国文庫旧蔵本・谷森本が「さこ」とする。

この箇所に関する注文は、初稿本から中間本までは同文であるが、再稿本に至って増補が見られる。初稿本・中間本の注文では、左近右近のひおりについて等しく注釈を加えている。再稿本ではひおりについての注文も増加している（長大なので省略した）が、注目すべきは波線部で、この章段は五月五日の左近のひおりの日の出来事である、と記している部分である。つまり兼良は、初稿本の段階では「右近」の本文を採っていたが、刈谷本を経て最終的には再稿本で「左近」の本文を採り、その本文と日付で解釈したのだということが判明する。

この項では初稿本から再稿本への展開と藤房本との関わりを示してきた。最後に、兼良自筆本の残らない上巻ではあるが、次の箇所を取り上げる。

【九段】

「時雨亭本」

舟こそりてなきにけり。

舟のうちの人、こそりてみなゝきける也。

其河をわたりてすきていく。

此下定家卿自筆本無之。

この部分について、田中宗作は以下のように指摘している。

「その河をわたりすぎていく」の一文は、現存諸本中塗籠本のみにある、

その河渡すぎて京に見しあひて、物語してことづてやあるといひければ、

みやこ人いかゞとはゞやまたかみはれぬ雲井にわぶとこたへよ

とする一段（第九段の次に入る）に関係のあるものであることは否定できない。

しかしこの箇所は、藤房本にも次のようにある。片桐・鈴木解説も、この箇所については藤房本との一致を指摘している。藤房本の書写形式に則して翻刻する。

「藤房本」

……ふねこそりてなきにけり。成本十七巻之その河をわたりすきていく。京にみし人あひて物かたりして、ことつけやあるといひければ、

宮こ人いかゝとゝはゝみねたかみはれぬ雲井にわふとこたへよ
となんいひける

「その河を……」の右肩に朱の合点が付されており、章段が改まることか、内容に展開があることを示しているが、「ふねこそりてなきにけり」から改行せずに続けている。「或本上下無之」の下に、朱で傍記があり、

影印では判読が困難ではあるが、「定家卿自筆本無之」と読めるように思われる。

さて、物語の全文を引用する刈谷本では、以下のようになっている。

〔刈谷本〕

舟こそりてなきにけり。その川をわたり過て行。京見し人あひて

此下定家自筆本無之

物かたりして、ことつけやあるといひければ

宮こ人いかゝとはゝみねたかみはれぬ雲井にわふと、となん

いひける。舟のうちの人、こそりてなきける也。

物語本文と注文の切れ目に不審があるが、「その河をわたりすぎていく

……」の文章が本文として掲出されているのである。

この箇所は、加藤著書によると、塗籠本・藤房本の他にも、天理図書館蔵伝為家筆本第二部も同様の本文を有する（天理本・佐渡博本・堯孝にはこの本文は無い）。藤房本のみ独自の本文でないとはいえ、特異な本文を共有している点、そしてその注記が共通していることには注目される。

ちなみにこの箇所は、愚見抄初稿本では以下のようになっている。

〔田中本〕

舟こそりて （兼・如「なきに」） なき けり。

此下定家自筆本無之。

舟のうちの人こそりてなきける也。

注文は鉄心斎本でも文字遣いの違いはあるが同文である。武井本も、「此下定家卿自筆本二無之」を割注にしている他は同文である。

つまり兼良は、初稿本の時点で、「舟こそりてなきにけり」以下に、定家本に無い本文があることに注意を喚起しつつも、積極的にその本文を採用はしていなかった。しかし初稿本から再稿本への過程で、少なくとも中間本の刈谷本の段階で、嘉吉三年に校合した藤房本の本文を採用して愚見抄に取り入れたと推測されるのである。

藤房本は、奥書によると定家本系統に属する一本であるが、本文は天福本・武田本とも異なる別本系統であると位置づけられている本である。こうした特異な性質を持つ藤房本が、愚見抄にも色濃く影響の跡を留めていることには注目される。先掲の池田亀鑑による指摘に、「これは桃花房の家本となつたものであるが、その内容は大体流布本の如く思はれ、嘉吉校合本を底本としたものではなく、愚見抄の本文も亦同様である点から見ると、兼良の勢語本文に対する考へは、随時展開したものと思はれる」（傍線、引用者）とあり、ここで「嘉吉校合本」と呼ばれているのが藤房本のことである。兼良筆の『伊勢物語』諸本および愚見抄が、藤房本を底本としてはいないことは、池田の指摘の通りである。しかし、藤房本に見いだせる特異な本文が愚見抄に反映しているのは、検討してきたことから充分に窺われる。四十代の時に校合・補写した藤房本は、兼良の伊勢物語研究において、繰り返し参看されたものであったのである。

（三）兼良自筆本と愚見抄

愚見抄の本文が、『伊勢物語』諸本において、兼良自筆本と一致する箇

所について、まず天理本から見ると、以下の箇所が挙げられる。

【一〇七段】

〔時雨亭本〕

つれ／＼のなかめにまさるなみた川袖のみぬれてあふよしもなし

愚見抄諸本、「袖のみぬれて」で一貫している。武田本・天福本では「袖のみひちて」、藤房本・佐渡博本でも「袖のみひちて」で、堯孝本では「ぬれ」を擦り消して「ひち」と書かれている。天理本の本文は「そてのみぬれて」で愚見抄と一致する。

「袖のみぬれて」の本文は、天理本の他にも、加藤著書によると最福寺本・大阪府立大学学術情報センター図書館蔵伝兼好筆本・広島大学図書館蔵永祿八年幽齋本・鉄心齋文庫蔵三井家旧蔵本・塗籠本に見られる。

ただし天理本との本文一致で注目される箇所はこの例のみで、他には特に見いだせない。愚見抄との本文一致は、佐渡博本により多く見いだすことができる。

【一二三段】

〔時雨亭本〕

野とならほうつらとなりてなきをらんかりにたにやは君かこさらん

田中本のみ「君かこさらん」で、鉄心齋本・武井本・刈谷本では時雨亭本と同じ「君かこさらん」である。この箇所は、武田本・天福本では「君はこさらむ」で、藤房本・堯孝本・天理本でも「きみはこさらむ」。古本系で「君かこさらむ」の本文を有するものもあるが、兼良関連の本においては佐渡博本のみが「君かこさらむ」で愚見抄と一致する。

また、次の六九段の本文にも注目される。

【六九段】

〔時雨亭本〕

かきくらす心のやみにまよひにき夢うつゝとはよ人さためよ

愚見抄諸本では一貫して「よ人さためよ」。この箇所は、武田本・天福本でも「こよひさためよ」に「一説よひと」と傍記があり、多くの諸本が傍記で二説を並記する。藤房本も「こよひさためよ」に「一説ヨヒト呼人世人余人说二不同口伝也」と注記し、堯孝本も「こよひさためよ」に「一説よひと呼人世人余人说々不同口伝也」の朱の傍記と「イ本一説ヨヒト、ハカリアリ」と墨の注記がある。一方、「よ人さためよ」の本文のみを持つ本は古本系にも見られるが、佐渡博本も「よ人さためよ」である。天理本は「こよゐさためよ」。

次の箇所は、愚見抄と藤房本・佐渡博本の本文が一致する箇所である。

【六八段】

〔時雨亭本〕

かりなきて菊の花さく秋はあれと春はうみへに住よしのはま

刈谷本は「春の」とするが、武井本は時雨亭本と同じく「春は」である（初稿本には該当箇所本文ナシ）。武田本・天福本では「春の」、堯孝本・天理本も「はるの」である。「春は」は塗籠本他の古本系に見られる本文であるが、藤房本・佐渡博本も「はるは」である。

また、佐渡博本との一致において注目されるのは、愚見抄の初稿本から再稿本への過程で物語本文が見直された箇所において、再稿本と佐渡

博本の本文が一致している箇所がある点である。たとえば、先の項目で挙げた八一段の「いたいしき」の箇所であるが、この箇所は、佐渡博本も「いたいしき」の本文を有している。先にも述べたように、初稿本の段階では「いたしき」、刈谷本も「いたしき」、武井本と再稿本では「いたいしき」であり、再稿本の段階で「いたいしきとは板敷也」という注文が付されていることから、再稿本では明確に「いたいしき」の本文を採用したという過程が窺われる箇所である。この箇所について、佐渡博本でも「いたいしき」の本文を有している点には注目される。

佐渡博本と愚見抄、および藤房本との本文の一致が見られ、さらにはそれが再稿本における本文変更とも連なっていることから考えると、佐渡博本が、初稿本から再稿本の間¹⁰に書写されたことには大きな意味があると思われる。佐渡博本の親本が堯孝本と共通するものであったことを藤島綾が指摘しているが、佐渡博本の書写を通じて、兼良が藤房本の本文に立ち返って検討し、その本文を採用したという過程を想定できる。つまり、藤房本および初稿本以来採用してきた物語引用本文を、再度検討する資料として、佐渡博本の本文が働いたと考えられる。

(四) 他本との関わり

以上、藤房本や兼良自筆本との関わりから、愚見抄所引の物語本文を検討してきたが、それだけでは解決できない箇所も散見する。

【一〇二段】

〔時雨亭本〕

そむくとて雲にもらぬものなれと世のうき事そよそになるてふ

【二〇八段】

〔時雨亭本〕

夜ゝ／＼にかわつあまたなく田には水こそまされ雨はふらねと

この二箇所は、いずれも愚見抄では一貫した本文である。しかし、物語諸本では一〇二段「雲には」・一〇八段「よひごと」で、藤房本・天理本・佐渡博本・堯孝本も同様である。加藤著書によると、いずれの箇所も、傍記が入っているものもあるとはいえ、諸本「雲には」「よひごと」であるという点に異同は無い。つまり、「雲にも」「夜ゝ／＼」は現存諸本には見いだせない、愚見抄の独自本文である。

以下は、少数の諸本に一致する本文が見いだせるものである。

【七七段】

〔時雨亭本〕

右のむまのかみなるおきな、めはたかひなからよみける。

愚見抄では一貫して「なる」、諸本では「なりける」である。加藤著書によると、「なる」の本文を持つのは流布本系の神宮徴古館蔵伝飛鳥井雅俊筆本のみ。

【二〇九段】

〔時雨亭本〕

花よりも人こそあたになりけりいつれをさきにこひんとかせし

初稿本では「見し」、武井本は再稿本と同じく「せし」、刈谷本は「せし」と傍記により二種の本文を併記する。再稿本への過程で本文が変更され

た箇所である。武田本・天福本、および藤房本・堯孝本・天理本・佐渡博本でも「見し」。「せし」の本文を持つのは、加藤著書によると古本系の最明寺藏時頼本のみである。初稿本から中間本の間で、古本系の本文を参照したと考えられる箇所である。

【六二段】

「時雨亭本」

いにしへのほひはいつらさくら花こけるかこともなりにけるかな
にほひはいつらは、句はいつくへなにとなりたるそ、いまみれば、
花をこきすてたることくになりたると、此女の心かしこくもなき
事をあさけりいふ詞也。……

第四句は田中本・武井本「こけるかことも」、鉄心齋本「こけるからとも」、刈谷本は当該章段を含む箇所が落丁しており不明である。この箇所についての注文は初稿本・武井本も同文である（ただし破線部は初稿本には無い）。

「こけるからともなりにけるかな」は「花をしこき落とした枝（＝幹）からとなつてしまった」の意で、「こけるがごともなりにけるかな」だと「花をしこき落としたようになつてしまった」の意となる。兼良は波線部に「花をしこき捨てたようになった」と注しており、注文に沿った本文が「こけるがごとも」であるのは明白である。

この箇所は、武田本・天福本ともに「こけるからとも」、藤房本・天理本・佐渡博本・堯孝本も同じく「こけるからとも」である。加藤著書によると、古本系・根源本系に属する本に「こけるかことも」の本文を持

つものがある。管見に入る兼良関連の『伊勢物語』写本では「こけるからとも」であるが、それ以外の諸本から採用した本文ということになる。

この六二段や、八一段・九九段の例に顕著なように、愚見抄に引かれる物語本文は、兼良の物語解釈と密接に関わっている。愚見抄所引の本文が、どれか一本に依るものではなく、兼良が諸本を参看した研究成果の反映であることは、田中および片桐・鈴木解説が指摘したところである。武田本系統の定家本を基本としながらも、そのみに依拠せず、兼良が諸本の本文から採るべきと考えた本文を採用したものであることが確認される。また単純に、藤房本に依って、もしくは、何らかの一本によつて対校・引用されたのではなく、数々の本を校合し、検討し、参照しながら、解釈と連動しつつ確定していった本文が、愚見抄の中に引かれた物語本文なのである。

結びに

現在知られるもの以外にも兼良は『伊勢物語』をたびたび書写していた可能性がある。それぞれの書写態度についても、自身の研究のために書写するのか、または他の人に譲るために書き写すのか、加えて誰に譲るのかなどによつて、その書写態度には違いがあると考えられる。

兼良の書写態度および研究との密着という点から見ると、四十二歳當時に補筆し、校合を加えた藤房本は、兼良にとつて『伊勢物語』研究の際の本文として、非常に重要なものであったということが分かる。また、

佐渡博本も、兼良の研究過程に位置する本として注目される。

初稿本から再稿本への本文の変化のより詳細な検討や、藤房本に書き込まれた膨大な注記や堯孝本と兼良の研究との関係、『古今集童蒙抄』との関連など、今後検討すべき課題は山積するが、小稿は以上で擱筆する。

〔注〕

- (1) 大津有一『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』(昭29初版・宇都宮書店、昭61増訂版・八木書店)第二章第一「一條兼良と伊勢物語愚見抄」、田中宗作『伊勢物語研究史の研究』(昭40・桜楓社)所収「伊勢物語愚見抄の成長―初稿本と再校本との比較についての報告―」、武井和人『一條兼良の書誌的研究 増訂版』(昭62初版、平12増訂版・おうふう)第3章第3節「伊勢物語愚見抄」
- (2) 二〇一七昨春秋に開催した、国文学研究資料館特別展示『伊勢物語のかがやき』のパンフレットにおいて、この②愚見抄初稿本の解説を担当したのは筆者であるが、「上巻のみである」と記載している。この記述は他の資料と混同した誤りであり、上下巻ともに存する。この場を借りて訂正する。
- (3) また、注釈本文においても、

【九段】

ほとひにけり

これ、飯か泪にほとひたる也。

【二段】

其女、世人にはまされりけり

世の人にまされるといへり。夢現とはよ人定めよとよめる、是に

同じ。

采・行間補入
其人カタチヨリハ、心サシマサリタリケル。

九段は掲出部分全てが、二段は片仮名書きの部分が田中本にない本文である。二段の例は朱筆で行間に補入されているものであり、さらには再稿本にも見えない注文であるので、性質についてはさらに検討の必要がある。これについては、以後の課題にしたい。

- (4) 前掲注(1) 大津著書
- (5) 前掲注(1) 武井著書、木下美佳「刈谷市中央図書館蔵『伊勢物語愚見抄』の位置付け」(『中古文学』82、平20・12)
- (6) 池田亀鑑「伝藤原藤房筆別本伊勢物語の本文について」(『中古国文学叢考第三分冊』和歌・歌物語・日記・説話に関する論考)〔昭22・目黒書店〕所収
- (7) 前掲注(1) 田中著書
- (8) 前掲注(6) 池田論文、大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺・索引・図録篇』(昭36・有精堂出版)、福井貞助『伊勢物語生成論』(昭40・有精堂)、武井和人『中世古典学の書誌学的研究』(平11・勉誠出版)第一章第二節B「伊勢物語」、同『一條兼良の書誌的研究 増訂版』(昭62初版、平12増訂版・おうふう)【補遺】III追補論文(2)「伝藤原藤房筆本『伊勢物語』攷―奥書・勘注をめぐって

―、『伊勢物語 伝藤原藤房筆本』（平10・古典文庫）吉田幸一
解説

（9）前掲注（1）田中著書

（10）藤島綾「佐渡博物館蔵『伊勢物語』―解題・影印―」（『調査研究
報告』30、平22・3）

【付記】

本稿は基幹研究「鉄心斎文庫蔵伊勢物語資料の基礎的研究」による成
果の一部である。また、本稿の執筆に際し、資料などについて藤島綾先
生から様々なご教示を賜った。特に記して御礼申し上げます。